

## 豊かな「遊び」スポーツの起源に帰ろう

朝日 26 日朝刊「2021+1 思う」山極寿一さんに注目した。東京五輪「騒動」でスポーツに懐疑的になっていたのが参考になった。抜粋して紹介する。

スポーツの起源は遊びである。私は日本学術会議の会長をしていた 2 年前に、当時の鈴木大地スポーツ庁長官から依頼を受けて、「科学的エビデンスに基づくスポーツの価値の普及のあり方」について審議したことがある。そのとき、スポーツの本来の意味は「気分転換」であり、それが貴族たちの野外の余暇活動となり、身体を酷使する競技となったのは 19 世紀以降であることを学んだ。

私が長く研究してきたゴリラもよく遊ぶ。取っ組み合ったり、追いかかけ合ったりして、ときには短い休止を挟んで 1 時間以上も遊び続けけることがある。互いに高いところの上って胸をたたき合う「お山の大将ごっこ」や、数頭が数珠つなぎになって歩く「電車ごっこ」に似た遊びもある。遊びの特徴は、経済的な目的を持たず、体の大きいほうが自分の力を抑制して小さいほうに合わせ、互いに役割を交代するところにある。

身体を同調させる楽しさを追求する中で、こういったルールが自然に立ち上がる。人の遊びもこのルールを踏襲しているし、スポーツの原則もここにあるのではないだろうか。相手に勝つことが目標ではなく、互いに立場を交代しながら競い合い、そのプロセスを楽しみ、勝ち負けにこだわらず健闘をたたえ合う。いっしょにスポーツに興じたことによって、よりいっそう信頼できる仲間となる。観戦者もこの同調の輪に巻き込みながら、スポーツは私たちの社会を和ませ、新たなきずなをつくることに貢献してきたのだと思う。

しかし、最近のオリンピックは商業主義が目立ち、観光収入や放映権をめぐる大量の札束が飛び交う国家事業になった。放映権を握るアメリカのテレビ会社に配慮して競技の時間を設定したり、海外のプロスポーツとかわち合わないよう酷暑の夏に開催したりと、どうも選手や観客の健康に配慮しているとは思えない。

一番の問題は、オリンピックが国の威信をめぐる戦いの場と化していることだ。新型コロナを体験した私たちは、スポーツの本来の意味に戻る必要がある。スポーツを経済的な目的を持たない、人間の福祉に貢献する遊びと考えれば、さまざまな交流が芽生える新しい世界が開けると思う。

幼いときから病弱で運動は苦手だったが、「スポーツ」は好きだった。下手くそながら草野球に熱中したことも。名古屋の短大に就職してから、昼休みに職員のみなさんらとソフトボールを楽しんだ。真夏の土曜日に「対抗試合」があり、毎回のように参加した。試合後のビールが本当にうまかった。教職員の交流・新朴も深まった。私にとって、貴重な「スポーツ体験」だった。山極さんの寄稿から懐かしき時代を思い起こした。

(2021 年 7 月 29 日)